

安倍さんの志を継いで

衛藤晟一 参議院議員

留魂録

昭恵夫人は、増上寺での葬儀の挨拶で、安倍晋三さんが父の晋太郎さんへの追悼の手記の中で、吉田松陰の留魂録(りゅうこんろく)を引用されたことを紹介して、「主人も政治家としてやり残したことはたくさんあったと思いますが、本人なりの67年の春夏秋冬があったと思います。最後、冬を迎えましたが、種をいっぱい蒔いているので、それが芽吹き、やがて実を結ぶことでしょう」と涙されました。

安倍さんが尊敬してやまなかったのは吉田松陰先生、伊藤博文初代内閣総理大臣、そしてお祖父さんの岸信介氏でした。

自民党綱領をめぐる攻防

安倍さんは平成5年に衆議院に初当選されますが、当時、自民党は政権を失って下野していました。政権復帰には党の改革が必要だということでいろいろな改革論議が起きました。その中で出てきたのが自民党の綱領から自主憲法制定という文言を削るべきだという意見でした。当時、党の改革委員会に私や中川昭一さんらと共に入ったのが安倍さんでした。私たち若手は猛反発し、真の独立国家を目指すために、これからの時代にふさわしい憲法をつくるべきだと主張し、憲法改正の党是を守ったのです。そのときから安倍さんとはまさに同志として一緒にやってきました。

皆さん、あまりご存知ないかもしれませんが、安倍さんは社会保障政策にも精通していました。お祖父さんの岸信介総理は安保改定で苦勞されましたが、国民皆年金制度を敷き、国民皆医療保険制度への道を開きました。

そして孫の安倍さんは、私たちと共に、介護保険制度をつくるのに尽力しました。安倍さんをその道に引き込んだのは私です。少子高齢化が進むなかでいかに社会保障を守るか、しっかりと理解しておかないと総理にはなれないよと、私は安倍さんに進言して自民党の社会部会(現在は厚生労働部会)で一緒に汗を流しました。のちに総理になった安倍さんから「衛藤さん、あなたの言った通りだった。社会保障の勉強をやっておいてよかった」と言われました。党首討論でも社会保障についての安倍さんの精通ぶりは他を圧倒していました。

教育への思い

平成9年には「日本の前途と歴史教育を考える若手議員の会」(*)をつくりました。

(*)のちに「日本の前途と歴史教育を考える議員の会」へ名称変更。

中川昭一さんが会長、私が幹事長、安倍さんが事務局長でした。教科書に「従軍慰安婦」という記述が載ったときで、勉強会を積み重ね、「従軍慰安婦」などという用語はあとで恣意的に作られたも

ので、当時、慰安婦はいたけれども強制連行はなかった、ましてや 20 万人の性奴隷など全くなかったことが分かりました。こうして教科書改善にも寄与できました。そのときの思いは、のちの戦後 70 年談話の「私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」に続いています。

さらに教育基本法改正にもつながっていきます。旧教育基本法は個人の人格の完成ということを目標に掲げていましたが、社会に有為の人間を育てるという視点が欠けていました。教育はその両輪がなければならないということで、教育の目標をどう定めるか、について安倍さんは腐心されました。

そして新教育基本法では、第二条の「教育の目標」に、「豊かな情操と道徳心を培う」「勤労を重んずる態度を養う」「公共の精神に基づき、主体的に社会の形成に参画」「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできたわが国と郷土を愛する」など書き込まれたのです。これは第一次安倍政権の重要な成果でした。確かに種は撒かれているのです。あとはその志を継いだ私たちが、この種を大切に育て、花を咲かせ実を結ばせていかねばなりません。

創生「日本」

平成 21 年(2009)、自民党は再び下野し、民主党政権となりました。その時は中川昭一さんが落選されて、その後亡くなられるという悲劇もありました。民主党政権が 10 年も続けば自民党も日本もガタガタになってしまうと危機感を強めた私たちは、保守の中核体を作っておかなければならないと、その 2 年前に平沼赳夫先生らと結成していた真・保守政策研究会を創生「日本」へと衣替えしました。名称は候補のひとつ「日本創生」から安倍さんが文字の並びを変え、決めました。3 年半かけて勉強会を重ね、中間報告『新しい「日本の朝」』をまとめました。わずか 8 頁のレポートでしたが、のちの第二次安倍政権で取り組まれた重要政策はほとんど入っています。このタイトルも安倍さんが決めました。安倍さんの思いが詰まっていました。

外交安全保障政策では、安倍さんのすぐれた戦略家としての資質を世界の識者は高く評価していました。米ハドソン研究所前所長のワインスタイン氏は、安倍さんはレーガン大統領に匹敵する戦略家だと言いました。レーガンは長年にわたりソ連研究を重ね、冷戦終結を導いた。安倍さんは早い時期から台頭する中国の挑戦を認識し、これにいかに対処していくかを考え、クアッド、自由で開かれたインド太平洋構想を実現した、と。

吉田茂が敷いた戦後日本の体制を乗り越えて新しい体制をつくらなければ国はもたない、との強烈な危機感をもっていた安倍さん。だからあれほど支持率を落としながらも平和安全法制も通すことができた。そのおかげで米軍との信頼関係が深まり、抑止力が高まりました。

日本を誇れる国にしたい

若い世代に安倍さんへの支持が多かったのはアベノミクスによる経済再生が大きな要因のひとつでしょう。デフレ脱却のための金融緩和を断行したときの安倍さんの覚悟は見事でした。GDP は飛躍的に伸び、有効求人倍率は倍増、失業率は半分になりました。

安倍さんが亡くなったあと、自民党清和政策研究会(安倍派)の総会に来られた昭恵さんは、こう話しておられました。「主人は常々、日本を誇れる国にしたい、子供たちが生まれてよかったと思える国にしたい、世界に輝く国にしたい、と言っていました」と。その思いもあって、「日本を取り戻す」「戦後レジームからの脱却」を掲げて頑張ったんだと思います。

覚悟の人

第二次安倍政権が終わった直後、創生「日本」のメンバーが東京の椿山荘に集まりました。その際の会長挨拶で安倍さんはこういう話をされました。「この椿山荘は山県有朋の邸宅跡だ。山県は生前、伊藤博文がうらやましいと言っていた。伊藤は、松陰先生はじめ多くの方々が倒れていったのに自分だけがおめおめと生きている、せめて死ぬときだけは畳の上で死にたくない、と言っていた。そういう覚悟をもって伊藤は生きていた。そして伊藤はその言葉通りハルピン駅頭で凶弾に倒れた。だから山県は伊藤がうらやましいと言っていた」。まさにそのような覚悟で安倍さんはやっておられたのです。

吉田松陰の留魂録の冒頭に掲げられているのは、
「身はたとひ武蔵野の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」

という和歌でした。私たちは、安倍さんの魂を慕いつつ、その志を継いでいかなければなりません。

(本稿は10月1日、佐賀市で開かれた「安倍晋三元首相を偲ぶ佐賀県民の集い」での特別講演の要旨を校閲いただいたものです)